

史跡小牧山発掘調査主郭地区第7次発掘調査 現地説明会 資料

平成27年2月14日（土） 11:00～

小牧山城縄張図
（破線の範囲が主郭地区）



春日井郡小牧村古城絵図（部分拡大）
※十七世紀中頃 蓬左文庫蔵



遺 跡 名

こまきやまじょう
小牧山城（国指定史跡 小牧山）

所 在 地

愛知県小牧市堀の内一丁目地内

調 査 理 由

史跡整備

調 査 面 積

約200m²

調 査 期 間

平成26年11月～平成27年3月（予定）

調 査 主 体

小牧市教育委員会



図1 調査位置と見学ルート

1 調査の概要（何がでてきたのか）

史跡小牧山主郭地区の発掘調査は史跡整備に伴う事前調査のため、4ヵ年の試掘調査と6ヵ年の発掘調査を経て、今年度が11年目となります。今回の調査と過去の調査成果から、永禄6年（1563）に織田信長が築いた小牧山城の姿が徐々に明らかとなってきています。

今年度の調査で得られた主な成果は以下のとおりです。

【注意】

小牧市では従来の調査の成果から、石垣の呼称を「上段石垣」、「下段石垣」と表現してまいりましたが、このたびの確認をうけて「石垣Ⅰ」（＝上段石垣）、「石垣Ⅱ」（＝下段石垣）、「石垣Ⅲ」（＝3段目の石垣）と改めさせていただきます。

1. R区（写真1・2）

主郭（本丸）北斜面の調査区です。山側から石垣Ⅰ、Ⅱ、曲輪051、石垣Ⅲを確認しました。

石垣Ⅰは北西～北～北東と3方向に屈曲を繰り返しています。北西～北の屈曲部（出隅）には隅角石の基底石が残存していました。石垣Ⅱ、Ⅲもそれぞれ石垣Ⅰに並行するような平面プランで築かれています。

昨年度実施した北西斜面の調査では、石垣Ⅱ前面の平坦部（曲輪051）に幅1mほどの範囲に拳大の扁平な川原石が敷き詰められていましたが、今回の調査では確認できませんでした。



写真1 R区 石垣Ⅰ・Ⅱ



写真2 R区 石垣Ⅰ 出隅部

2. S区（写真3、4）

主郭(本丸)北東斜面の調査区です。山側から石垣Ⅰ(一部)、Ⅱ、曲輪 051 を確認しました。調査区の南端では現代の大規模な攪乱が見つかり、それによりこの調査区から南では石垣Ⅰ(一部)、Ⅱの大半が失われています。

石垣Ⅰは調査区北端を除きほとんどで築石が失われています。築石の背後の裏込石層と主郭の造成土層は残存しているため、石垣のおよそのプランと高さが推定できます。調査区南端のトレンチ(土層観察用の調査溝)では、裏込石と主郭の造成土を区画するために意図的に投入された「土留石(押さえ石)」といわれる大ぶりの石材が垂直方向に埋設されている状況が良好に観察できました(写真3)。このことは石垣を築くにあたり、完成された土木技術を会得した集団が関与していることを伺わせます。

石垣Ⅱはこれまでの調査で確認した成果では一度に確認できた最長を検出しており、自然石を一直線に緻密に並べ、築いている状況がよく観察できます。調査区中央やや南寄りでは、石垣Ⅱ前面に掘られた直径約1mの土坑(SX01)により石垣Ⅱとその背後の裏込石と造成土が崩落している状況も看取されます。

調査前には主郭北の斜面のみに築かれたと想定していた石垣Ⅲは、石垣Ⅱからやや東に広がるラインで北東斜面に延びることが確認されました。

3. 石垣Ⅲについて（写真5、6）

上記2調査区で確認した石垣Ⅲについては下記のような特徴があります。

構築状況の観察から、石垣Ⅲは石垣Ⅰ、Ⅱと異なり、「腰巻石垣」(写真6)である可能性が高いと思われます。

また石垣を構成している石材は石垣Ⅱと同等またはそれよりも小ぶりで 30～50 cm大のものが主体です。(写真5)多くを小牧山産出の自然石(堆積岩)が占めますが、搬入石材である花崗岩の石材も含まれ、その分布が石垣Ⅰ、Ⅱと比較して格段に多いことが特異です。また、これまで一切確認されていなかった丸石の築石2個体も確認しています。



写真3 S区 石垣Ⅰの背面構造



写真4 S区 石垣Ⅱ 崩落部分



写真5 R区 石垣Ⅲ 検出状況



写真6 腰巻石垣の一例（八王子城・東京都）

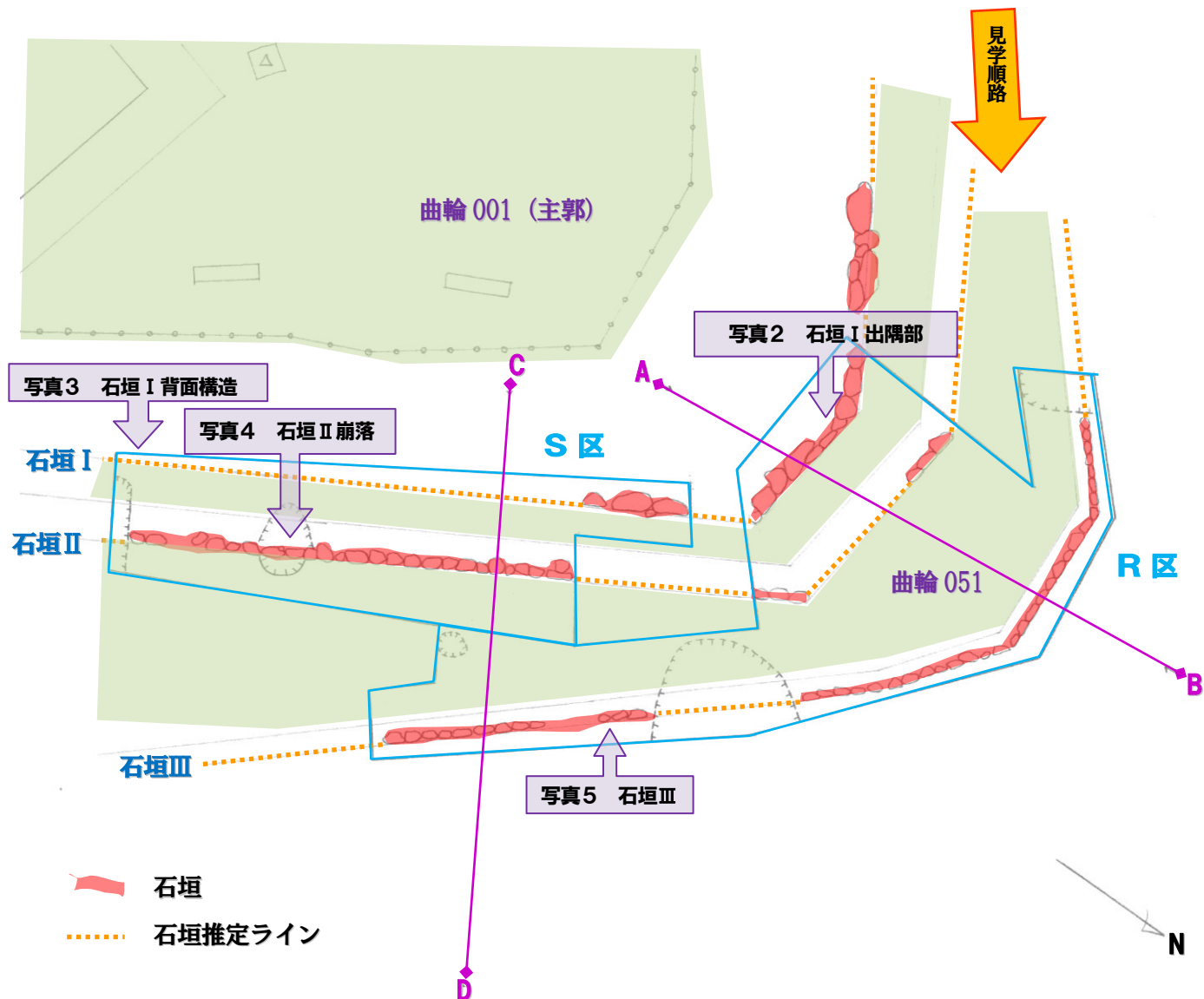


図2 R区・S区 遺構平面略測図

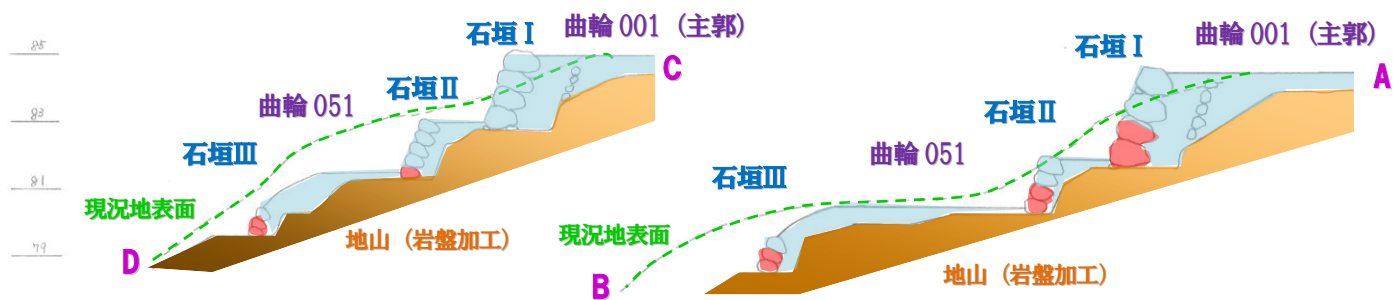


図3 R区・S区 石垣断面 想定模式図

2 まとめ（何が明らかになったのか）

3段目の石垣を確認しました。「腰巻石垣」を初めて確認しました。

これまでの主郭地区の調査では段築状に築かれた2段の石垣（石壁）や北尾根の一部に3段の石垣を確認し、小牧山城の中心部は概して2重の石垣で囲まれると想定していました。（図1 赤色破線参照）

しかし、今回の調査で北～北東斜面に3段目の石垣が延びていることが判明し、周囲を取り囲む可能性が出てきました。過去の試掘調査で主郭下段の曲輪でも石垣を使用している様子を2箇所確認していることと併せると、幾重もの石垣に囲まれた「石の要塞・小牧山城」という当時の最先端の城の姿をうかがい知る大きな手がかりが得られたのではないかと考えられます。

今回確認した石垣Ⅲの構築状況の観察から、石垣Ⅲは擁壁としての機能を重視した腰巻石垣で、主郭下段の帯曲輪（曲輪051）の平坦面をより幅広くする目的があったと考えられます。地盤の加工状況（地業）や造成状況を見ても計画的な設計意図をもって築城工事に臨んだことを伺わせます。

この石垣は永禄6年（1563）織田信長築城時のものと考えられます。当時30歳であった若き信長が手がけた初めての居城づくり、「城に石垣を使う」という初めての試みであるにもかかわらず、先進的な設計構想と高度な技術により出現した「理想の居城」です。近年の調査と研究により、小牧山の南に展開した小牧城下町の先進性と併せて、小牧で具現化する信長の城づくり、まちづくりがその後の城郭や城下町に影響を及ぼしたと考えられるようになってきましたが、当時の「非常識」を後の「常識」に変えてしまう信長の発想がどこからもたらされたものか、疑問は深まります。

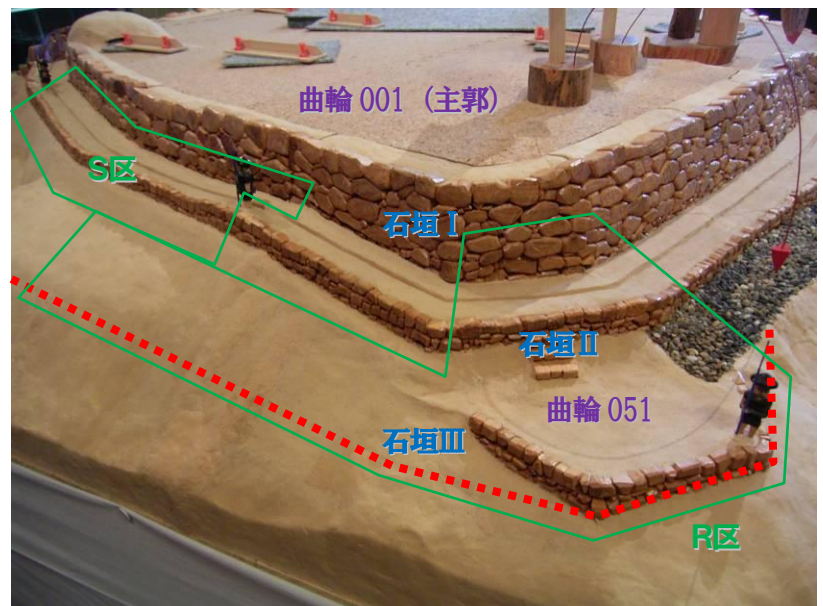


写真7 主郭北東斜面・石垣Ⅲの想定ライン
（小牧市歴史館展示模型に加筆）

付表1：小牧山の歴史

時 代	年	できごと
戦国時代	永禄 6年 (1563)	織田信長が小牧山城を築城し、清須から移る。小牧山南麓には城下町を整備した。
	10年 (1567)	織田信長、稲葉山城を攻略。岐阜と改称し、小牧山から居城を移す。小牧山城は廃城となる。
安土桃山時代	天正12年 (1584)	小牧・長久手の合戦 (羽柴秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍の戦い) 徳川家康は織田信長の小牧山城跡を改修して陣城を築く。
江戸時代	慶長15年 (1608)	名古屋城築城開始。小牧山城の石垣を持ち出しか？
		小牧山は尾張藩領となり、家康公ゆかりの地として、一般の入山が禁止される。
明治時代	明治 2年 (1869)	版籍奉還により、小牧山は国有地となる。
	5年 (1872)	県立小牧公園として一般公開される。
	22年 (1889)	小牧山が徳川家の所有となり、一般公開を止める。
昭和～平成	昭和 2年 (1927)	10月26日 国の史跡に指定される。
	5年 (1930)	徳川家から小牧町へ小牧山が寄付される。
	22年 (1947)	東麓に小牧中学校が建設される。
	43年 (1968)	山頂に小牧市歴史館が建設される。
	平成10年 (1998)	小牧中学校を史跡外へ移転する。
	15年 (2003)	小牧中学校跡地を史跡公園として整備、開放される。
	16年 (2004)	主郭地区試掘調査開始 (第1～4次調査)
	20年 (2008)	主郭地区発掘調査開始 (第1～7次調査)

付表2：織田信長天下統一への過程と城郭

年 代	信長年齢	できごと	城郭名	信長築城か？
弘治 元年 (1555)	22 歳	清須城入城	清須城 : 石垣なし	×
永禄 3年 (1560)	27 歳	桶狭間の戦いで今川義元を討つ		
永禄 6年 (1563)	30 歳	小牧山城築城、清須から移る	小牧山城 : 石垣構築	○
永禄10年 (1567)	34 歳	稲葉山城攻略、岐阜城と改め 小牧山城から移る	岐阜城 (千畳敷) : 巨石石積	改修
天正 4年 (1576)	43 歳	安土城築城開始	安土城 : 総石垣	○
天正10年 (1582)	49 歳	本能寺の変		